連載第２回では、前回とはモードを変えて、一篇の詩をお届けします。ここでは、「月」と「地球」のあいだに生まれる感覚をオートエスノグラフィー[i]として描きました。この詩は、意味を論理的に読み解く必要はありません。私が月を眺めたり、宇宙開発のリアリティを考えながら感じた感覚を、メタファー（比喩・隠喩）的に思考し表現したものです。心理的現実のなかで立ちあがる矛盾や揺らぎも、そのまま残したり、新たに矛盾を作り出したりしています。読みながら浮かんでくるイメージや身体感覚にゆっくりと触れていただければと思います。

第二の皮膚

眺められ、触れられ、わたしと世界の間にある
「無」との境界

それは皮膚、わたしの外側
それは風景、わたしの外側

風景は
傍らにある肌
そこに浸りつづける情動
破壊を拒む輪郭

月を眺める私は、「ここ」にはいない、
私の身体は、「そこ」にある
そこは　からだ表面を超えた　第二の皮膚

バックムーンの光を待ちわびる私は
いつからか、ガラス張りの小さな「地球」にいた。

その時、私は、月にいて
地球の青い記憶のにじみに触れている

その時、私は、地球にいて
金属の影が、スイカに群がるアリのように
私たちの　月を包囲する夢を見る

ふと、見慣れた風景の崩壊を感じ、
まだ予兆の中にある月の肌理に郷愁を抱く。

未来の風景が、今の私を懐かしむ
未来の私が、今の風景を懐かしむ

地球の境界に
名づけることも
触れることもできない
皮膚があった

---

[i] オートエスノグラフィーについては、以下を参照：
土元哲平・桂 悠介・サトウタツヤ編（2025）『オートエスノグラフィー・マッピング：「私」からはじめる研究手法を知るための地図』新曜社